

ボリス・グロイス著 亀山郁夫・古賀義顕訳

『全体芸術様式スターリン』

(現代思想新社)

ロシアに関する本を今読むのならば、評論が一番面白いかもしれない。アヴァンギャルドとスターリン時代の全体主義芸術という一見相反する芸術運動が、実は同じ根を持った芸術＝政治運動であることを鮮やかに示した本書は、狭い意味での芸術評論の枠をはるかに超えて、今世紀のロシア・ソ連についての文化評論、歴史評論としての奥行きをも兼ね備えている。とどこころに固有の文脈に由来する分かりにくさはあるものの、こなれた日本語も手伝い、読み手をぐいぐいと引き込む力に溢れている。ここ十年ほどはソ連崩壊後の不安定な政治・社会状況や経済的混乱といったニューズの氾濫に食傷気味だったこともあり、そうしたものは全く異なる一面を垣間見るのは正直なところ爽快ですらある。惜しむらくは本訳書があと五年早く出ていたら、各方面に今以上の衝撃を与えたであろうということである。ソ連崩壊という象徴的な事件に直面して、九〇年代前半には人文・社会科学を問わず、誰もが社会主義

とは何だったのか、二〇世紀とはどういう時代だったのかを問題とし、それに様々な回答を与えようとした。だが、当の「旧ソ連人」も含めて、多くが回答を暗中模索していた時期に（それどころか、本書は最初ドイツ語で八八年に刊行されているので、「それ以前に」なのだが）、少々ポスト構造主義のタムを乱発している印象を与えはするものの、著者グロイスがソ連体制の一面についてこれほど明快な見取り図を示したことは多いに評価されよう。いや、それどころか、種々の議論において未だに確固たる結論が出し尽くされていない状況からすれば、逆に本書が現代の評論として持つていく大きな意義はますます際立ってくると言わなければならぬ。

ついつい読後感ばかりが先行してしまっただが、それほど本書は多くの問題提起と示唆を含んでいる。何はともあれ、まずは一読されることをお勧めするとしても、それだけでは書評にならないので、ロシア思想に関心を持つ立場から興味深かった点をいくつか述べさせていたたくことにしたい。まず、恐らく最も重要なことは、本書には八〇～九〇年代のソ連とロシアが経験した「思想の復活」という一つの根本的な変化が

明確に刻印されているということである。当然のことながら、それは一面ではイデオロギー的な対立の終焉や体制選択の可能性の喪失といった一般の政治学的問題とも密接なかわりを持つものだが、はるかに重要なのはそれが同時に一九世紀からロシアで問われてきた思想的問題への（社会主義と言う一つの回答が試みられた後での、しかも二一世紀を目の前にしての）新たな回帰でもあるということだ。それは確かに「回帰」ではあるのだが、しかし決して退屈な反復などではなく、ロシアにとつての「近代」の意味を問い直す「原点回帰」にほかならないのである。

その一端は、冒頭でグロイスがスターリン文化を記述する際に示した姿勢の中に早々と見出すことができる。例えば、彼はスターリン型全体主義を成立させた権力観の問題について言及する際に、「革命という新世界創造の試みにおいては「社会に君臨する全面的な権力そのものが新しい生の創造者をあらゆる批判から庇護する」ことが不可欠な要件とされたことに触れているが、その言葉を聞いたロシア史家であれば、そのおよそ百年前のニコライ一世期に反動的官僚ウヴァーロフ

が「ロシアにおける唯一の創造的権力としての専制」を称揚している史実を思い出さずにはおかないであろう。無論、ソ連体制が帝政期の権力観を払拭するどころか、そのまま自らの足場としていることはしばしば指摘されることであり、単に過去との類似性を云々するだけでは、積極的に何かを語ったことにはならない。だが、そうした権力構造に積極的に関与していった芸術家の論理(倫理ではなく)を明らかにすることで、これまでとは違った視点からストーリー体制を成立させた構造にメスを入れたという点で極めて興味深い議論を構築していると言える。

また、その際には「下意识」というフロイトやラカンを想起させる精神的な概念を援用したアプローチを応用することが本書の一つの興味ともなっているわけだが、これまでの思想的な議論にある程度通じている者ならば、むしろグロイスが多用するキリスト教的な物言いの方が当時の精神状況を如実に言い当ててしまっていることを確認しないわけにはいかないだろう。なぜなら、「ロシアはおのれの生を、まだ誰も見たことのない新しい形式において組織する覚悟が西欧よりもはるかに固く、

そのためには未曾有の規模の芸術実験に身を挺することもあえて辞さない」ような革命精神が熱狂的なスターリン賛美へと収斂させられていくわけだが、そうした精神構造の相型として正教信仰があることも、やはりかねてから指摘されていることだからである。本書では簡略的にしか言及されていないが、革命前には正教的な表現で言うところの「終末論的な」雰囲気や時代を覆っており、象徴主義やアヴァンギャルド、科学論などの多様な分野に重大な影響を及ぼしている。実は、それが第一章の冒頭で展開されているマレーヴィチのスペレマティズム理論ともストレートにつながっているのである。この導入部の議論は背景を知らない日本の読者には分かりにくい部分であるかもしれないので、多少グロイスの議論に補足しながら跡付けてみたい。

テクノロジーの発達に伴い、「進歩」という概念が急速にリアリティを獲得しつつあった西欧においては、それによって生じた世界観の変化が「神の死」というイメージによって自覚され始めていたことは周知の通りである。グロイスによれば、アヴァンギャルドの運動とは、こうした変化への対応として、「技術の侵蝕がもたらした破壊

的作用を埋めあわせ中和することを目的としていた」のであり、テクノロジーの侵蝕に対する「守備陣」として、つまり常に敵の最前線の「前に」防衛ラインを形成しなければならぬはずのものとして登場したのだとされている。その際、マレーヴィチは「進歩」に対抗する唯一の戦略として、本質的にその外部に位置する「時間の外」、「歴史の外」という超越的な場を対置しようとしたのである。初期のアヴァンギャルドが破壊の過程、リダクションの過程を完遂する必要に迫られたのは、いかなる破壊や侵蝕にも犯されることのない領域を求めたからにはかならない。その結果として、マレーヴィチは純粹なフォルムとしての「黒い正方形」に到達したのである。

つまり、プロセスとしての「進歩」や「歴史」を超え出るためのヴィジョンを与えたのは、その外部を言い当てようとした「終末」の思想だったということである。しかし、こうした芸術理論の構築においては、芸術的想像力の源泉としてキリスト教の伝統的な形象が用いられているのは本質的に異なる契機がある。言わば、グロイスが「異界」のロジックと呼ぶよう

な、ある種の理論的源泉としての宗教的思惟の応用が見られるのである。それは、西欧の近代的思惟とは別種の理論的装置をロシアに伝統的な宗教的思惟が提供するという思想史的構図の一つのヴァリエーションだと言ふこともできよう。もはや心情の問題にとどまらず、すでに理論武装を施されたもの、そして哲学や美学ばかりでなく、社会科学や自然科学の一端にも組み込まれつつあった思惟の形として宗教的な思惟が確立されようとしていた時代背景がここに投影されているのである。

しかし、このユニークな戦略は革命という「終末的状况」の到来によって、旧世界の神の死後に新たな神の世界を建設する必要に迫られたときに、全く異なる運動へと転位することになる。後期のアヴァンギャルド運動が直面したのは、まさに革命のユートピアという「時間外」、「歴史外」の場で、新たな世界を創出しうるかもしれないという状況の出現であった。そこで芸術家が芸術作品に対して持つような絶対的権利が認められるならば、全権者となった芸術家Ⅱ指導者が唯一の創造神となり、世界Ⅱ国家建設のヴィジョンを与えねばならない。そうしたプロジェクトを具現するもの

として、スターリン体制は芸術家にとって不可欠なものとなったのである。このようにして、「終末」という絶対的な最終局面を超越的な領域から引きずり下ろし、進歩の極点としてのユートピアに置き換え、そこで君臨すべき「神」の座を全能の指導者が奪取することで、マレーヴィチら初期のアヴァンギャルドが構築した戦略は完璧に横領されてしまったのであり、それによって彼らの防衛ラインは完全に裏をつかれてしまったのである。スターリン体制と初期アヴァンギャルドとの、そしてまた一九世紀以来の思想的系譜との秘かな紐帯を解きほぐすことが、建設された「ユートピア」のその後とその終わりを考える際にも大きな意義をもつことは、それに続くグロイスの議論からも明らかである。

ある意味では、ロシア革命が近代ロシア史の総決算としての意味を持っていた以上、ソ連体制の終焉によって過去に問われた問題をもう一度考え直さなければならぬのは当然のこととも言えよう。だが、ソ連体制の終焉が今世紀の世界史の総決算としての意味をも持つ以上、ロシア史固有の言葉だけではもはや事足りないことも事実である。グロイスは用語や語り口の面で西欧か

ら多くのものを借用し、しばしば消化不良にのたうちまわりながらも、新たな回帰のあり方、その一つの語り方を試みているのであり、そうした実践の積み重ねによって、ソヴィエト時代の社会や文化の記述に驚くほどのリアリティを付与しえたのである。恐らく今後しばらくは同様の試みによって、かつて語られた言葉とグロイスが今日語る言葉がどのように通底しているのかを見通しながら、さらに新しい語りの可能性を開示するような作業が必要となろう。だが、それはロシアの歴史や文化、思想を研究する者すべてに課された大きな課題でもある。

(大須賀史和)